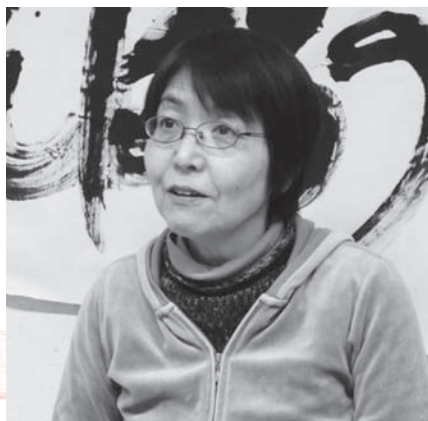


このひと



被災障害者支援NPO法人 ゆめ風基金事務局長

きつ たか ち あき
橋 高 千 秋さん

地震で助かって、 避難所や仮設住宅で亡くなる人々

大地震、大津波、さらには原発事故。東日本大震災では想像をはるかに超える被害が折り重なった。橋高千秋さんたちゆめ風基金は震災直後から行動を起こし、宮城、岩手、福島で地もと障がい者団体と共に「被災地障がい者センター」を立ち上げた。

17年前の阪神淡路大震災では障がい者救援活動に参加、体力のない人から脱落する避難所の実態を知った。元気な人がいち早く避難所に到着し、出遅れた障がい者や高齢者は吹きさらしのコンクリートの上で寒さに震えるしかなかった。「そして弱って死んでいく。地震そのもので亡くなった人が5500人、地震では助かったけれどその後亡くなった“関連死”の人が700人といわれています。避難所で弱って亡くなった人もいれば、仮設住宅で孤立してほとんど自殺のような状態で亡くなった人もたくさんいらっしゃる。関連死700人というのは驚くべき数字です」。以来、被災障がい者支援は橋高さんにとって最大のテーマとなった。

差別する側にいることを考え続ける

障がい者問題との出会いに特別な意思があったわけではない。大学卒業後、軽い気持ちで受けたボランティア養成講座が面白かった。そこに事務局の一ポストが空き、「やってもらえないか」と誘われて就職となった。

それまで障がい者やボランティアとの接点はまっ

障がい者とともに、 “健常者中心社会”を 問い続ける



たくなかった。張り切って働き始めた矢先、ある障がい者から「まず、あなたたち健常者は存在そのものが差別者であると知れ」と言われた。「きつかったけれど、今の法律や制度はすべて健常者がつくってきて、結果的に障がい者を排除や差別しているということがわかってきました。自分を差別者だと思うのはしんどいけれど、自分が差別する側にいることを認識して、考えることをやめないのが大事ではないでしょうか」

災害が起きても変わらない 行政システムの謎に迫りたい

1997年からNPO法人ゆめ風基金事務局長を務める。全国各地で被災障がい者の問題や、障がい者の視点を盛り込んだ防災計画を訴えてきたなかでの東日本大震災だった。被害の実態が明らかになるにつれ、阪神淡路大震災の時と同じように障がい者が疎外されている実態が見えてきた。「16年間何をやってきたのか。自分が情けない」と話す。

今回の震災を踏まえ、5年前に出した防災に対する提言集の改訂を進めている。「避難所の運営や仮設住宅の造り方を変えれば多くの障がい者が助かるのに、なぜ変わらないのか。その背景に迫り、変えていくための方策を探るのが私たちの役割だと思います。」

被災障害者支援NPO法人 ゆめ風基金
TEL:06-6324-7702 FAX:06-6321-5662
<http://homepage3.nifty.com/yumekaze/>